

書 評

Raymond Firth. *Malay Fishermen: Their Peasant Economy*. London: Routledge and Kegan Paul, 1966. xviii + 398pp.

著者 Raymond Firth は1901年ニュージーランド生まれ、イギリス社会人類学界の指導者である。この書物は Tikopia に関する社会構造、経済、宗教の3部作¹⁾を出版した後で行なわれたマラヤの漁村調査の成果であって、1946年に初版が出版された。Tikopia に関する著作が戦後の再調査によって改訂²⁾されたように、マラヤの漁民経済の本書も1966年に改訂版が上梓された。彼は経済人類学に関して、マオリ族を扱ったもの³⁾の外に、二つの論文集⁴⁾の編者でもある。従って本書を Firth の学問的体系より論究するか、または広く経済人類学における位置付けという観点

からも見る事ができる。しかし、本稿ではこの書物をマレー人村落社会研究に対する歴史の実証的な寄与とみなして、その内容の紹介および調査方法などについての考察をしたい。

人類学の本領は、Firth もたびたび述べているように、村落に入ってそこに定着し、研究対象とできる限り（最大限の）接触を保つことにある。こうしてデータを集めるために、W.H.R. Rivers の系譜法をはじめ種々の現地調査の技術が生みだされ改良されてきた。しかし、それでも人類学的現地調査は欠点を持っていると言われる。⁵⁾ 第1の点は選ばれた「代表」が全体をよく表現しているかどうかということである。調査そのものが時間的・空間的に限定されているにもかかわらず、時間的・空間的に特定なものを普遍的なものを取り易い。この点に関しては Firth は村落内のレベルでは、できるだけ多くのサンプルを数量的・体系的に集めることによって単なる推測による説明を排除する。そして体系的に集めたデータを下から積み上げてゆくことによって、全体的な推計を行なう。したがって村落レベルから州あるいは地域全体のことを述べるのも、このような具体的な数字に裏打ちされた比較的确实なものとみなされる。さらに定着した村落がマレー人漁村としてどれだけ典型的なものであるかを知るために、東海岸における漁村を広く見て回っている。このことは後にもう一度触れるであろう。

- 1) *We, The Tikopia*, London, 1936; *Primitive Polynesian Economy*, London, 1939; *The Work of the Gods in Tikopia*, London, 1940.
- 2) 各々の第2版の出版年は1957, 1965, 1967年である。加えて *Social Change in Tikopia*, London, 1959; *History and Traditions of Tikopia*, London, 1961; *Tikopia Ritual and Belief*, 1967 が出版されている。
- 3) *Primitive Economics of the New Zealand Maori*, 1929 (2nd ed. as *Economics of the New Zealand Maori*, 1959)
- 4) R. Firth & B.S. Yamey (eds.), *Capital, Saving and Credit in Peasant Societies*, London, 1964; R. Firth (ed.), *Themes in Economic Anthropology*, London, 1967. その他に人類学一般を扱ったものとして *Human Types*, London, 1938; *Elements of Social Organization*, London, 1951, 論文集 *Essays on Social Organization and Values*, London, 1964 があり、*Man and Culture—an evaluation of the work of Bronislaw Malinowski*, London, 1957 の編者でもある。近代社会の親族組織の研究として *Two Studies of Kinship in London*, 1956 を編している。

- 5) *Malay Fishermen*, 1966, pp. 351-52; *Primitive Polynesian Economy*, 1965, p. 4.

第2の欠点と Firth が言うのは、心理学的な側面であって、調査者が観察とかインタビューの際によりどころとする体系的な方法が確立されていないことである。個人の性向、その人が取る理論的枠組、あるいは種々の選択そのものにまで偏見の問題が入ってくる。理論的には自分の立場(偏見)を明確に認識することによって、これを避け得るのではないかと筆者は考える。しかし、実際に村落で直接人々と接触交渉する時には、調査者そのものの存在がすでに人々にとって disturbance であるというハンディキャップを背負われているので、簡単には解決がつかない。Firth の場合、支配者側からの人類学者として、いっそうの困難を増したであろうことが想像される。Firth のフィールド・ノートから引用されている会話の中で、マレー人が3度ほど Firth を“tuan”と呼びかけている所がある。もちろん Firth の人格・人柄に対する敬意ではあると思うが。

もう一つ人類学的な研究では「全体性」ということが言われるが、Firth は言及していない。例えば、有名な B. Malinowski のトロブリアンド島の研究のような、生活の全領域を包括的に理解しようとする立場である。漁村あるいは漁業の研究は、漁業経済学、法社会学(漁業権)、水産地理学、民俗学など多方面からのアプローチがあるが、人類学は漁村の全体構造をテーマとする点で、独自の領域を研究すると共に、それらの基礎学的な役割を果たすことが期待される。本書では、その副題が示すように漁民経済に的がしぼられている。家族などの問題は彼の妻によって別途に取り扱われているからである。⁶⁾ しかし両書を合わせても、マレー村落社会の全体像からは程遠い。これは対象となる社会が比較

的複雑なので短期間の調査でもって、現在の人類学の要求するデータの緻密さと精確さとを満たすことができないからであろう。例えば、タイ領ではあるが、マレー人漁民からなる村落のモノグラフ Thomas M. Fraser, Jr., *Rusembilan: A Malay Fishing Village in Southern Thailand* (New York, 1960) をとってみよう。Fraser は Firth の研究が、「完全なコミュニティ・スタディ」ではないとして、Fraser 自身は全体的な社会=文化組織を描こうとしている。調査期間も調査パターンも、夫婦で村に入ったという点も、Firth 夫妻の調査と類似している。それにもかかわらず Fraser のほうは中途半端な形に終わっているのは⁷⁾、的のしぼり方が不十分であったと言えないだろうか。全体像を描かずに、ある特定の現象を取り扱っても「全体性」という視座は必ずしも失われないことは、Firth の著書によってよく示されていると思う。

Firth 夫妻のマラヤでの調査は合計3回行なわれている。第1回は1939年から40年にかけての約12カ月間である。初版はこの調査の成果であり、第2版でもこの期間に得られたコミュニティ・スタディの結果はそのまま残されて、手を加えられていない。この12カ月の調査は4段階に分けられる。(1)最初の2カ月はクランタン州、トレンガヌ州沿岸の一般的サーベイ。(2)次の8カ月は集約的定着調査。(3)再びトレンガヌ州、パハン州沿岸の主要漁港における漁船、網、分配法等々の調査に1カ月。(4)最後の1カ月間は半島西岸部の比較サーベイである。夫婦で共同調査

6) Rosemary Firth, *Housekeeping among Malay Peasants*, London, 1943. (2nd ed., 1966).

7) 『東南アジア研究』1巻3号, pp. 107-8, 筆者による同書の紹介参照。なお、アジア・アフリカ文献調査報告第51冊(教育7)(1964)で *Rusembilam* をレビューした松永和人も、漁業と農業との全体的経済構造、マーケットとしての“Pattani”との関連、ボート集団の具体的な提示等の欠如を指摘している。

をするのは調査対象ごとに分業で働き得るので、とくにムスリム社会などでは有効である。(本書 p. 358)

第2回は1947年に約2週間ほど、1940年に定着調査した村を訪れている。⁸⁾ 第3回は1963年に約6週間、同村で再調査をした。この時は第1回の対象母体の約半分を対象として、同様な統計を得て、変化の実態を数量的に跡づけており、単なる印象による記述ではない点は評価されるべきである。

第2版は、したがって、時間的経過(23年)をおいた同地域の考察という点で貴重である。その上に第1版がそうであったように、第2版もまた、マレー人漁村の生産、マーケティング、分配の詳しい分析をした唯一のモノグラフであるという価値を持っている。マレー人村落社会を取り扱ったモノグラフは、Fraserのほかに、Judith Djamour⁹⁾、M. Swift¹⁰⁾、P. J. Wilson¹¹⁾、Tjao Soei Hock¹²⁾、Syed Husin Ali¹³⁾ などがおり、人類学的現地調査をしたのは D. Lewis¹⁴⁾、H. Strange、William

Wilder¹⁵⁾、Abdul Kahar Bador、Manning Nash、Rosemary Barnard、R. A. Jay、R. Downs¹⁶⁾、などがある。¹⁷⁾ 日本の研究者では、口羽益生(竜谷大)、坪内良博(京大)、堀井健三(アジ研)、景守豊(大阪市大)などが最近調査を行なっている。たしかに Firth の言うように、彼の著書に匹敵する漁村のモノグラフは出ていないが、シンガポール大学、マラヤ大学の経済学部学生の中には卒業論文のために漁村調査をするものもいる。¹⁸⁾ また政府機関である Federal Agricultural Marketing Authority では最近とくに魚のマーケティングに関心を増している。¹⁹⁾

本書の構成は11章と付録から成る。3章から10章までの主体となる部分は、1939年から40年にかけてのクランタン州バチョッ(Bachok)郡のプルポッ(Perupok)地区と仮称する数部落の集まりの一部(世帯数331、人口1,301人を調査の対象とする)の集約的調査の結果であって、第1版も第2版も変わら

- 8) 同年のマラヤ訪問(約3カ月間)については、*Report on Social Science Research in Malaya*, Singapore, 1948 として報告が出されている。
- 9) *Malay Kinship and Marriage in Singapore*, London, 1959. アジア・アフリカ文献調査報告第32冊(民族2)(棚瀬襄爾, 1964) 参照。
- 10) *Malay Peasant Society in Jelebu*, London, 1965. 『東南アジア研究』3巻5号, p. 175, 坪内良博による紹介参照。
- 11) *A Malay Village and Malaysia—Social values and rural development*, New Haven, 1967. 『東南アジア研究』5巻2号, p. 198, 坪内良博の紹介参照。
- 12) *Institutional Background to Modern Economic and Social Development in Malaya—with special reference to the East Coast*, Kuala Lumpur, 1963.
- 13) *Social Stratification in Kampong Bagan: A Study of Class, Status, Conflict and Mobility in a Rural Malay Community*, Singapore, 1964. 『東南アジア研究』3巻3号, pp. 203-204, 坪内良博の紹介参照。
- 14) “Inas, a study of local history” が *JMB-RAS* に掲載の予定。

- 15) “Islam, Other Factors and Malay Backwardness: Comments on an Argument,” *Modern Asian Studies*, Vol. II, Pt. 2 (1968), pp. 155-64.
- 16) A Kelantanese Village of Malaya, in J.H. Steward (ed.), *Contemporary Change in Traditional Societies*, Vol. II. (1967), pp. 105-186.
- 17) Elise Tugby, “The Distribution of Ethnological and Allied Fieldwork in Southeast Asia, 1950-66,” *Current Anthropology*, Vol. 9, No. 2-3 (1968); *Man in Southeast Asia*, No. 4 (1969), University of Queensland.
- 18) T.H. Silcock (ed.), *Readings in Malayan Economics*, Singapore, 1961. 参照。
- 19) FAMA Deputy Director, A. Aziz Yassin 氏からの話(1968年)。なお FAMA の雑誌 *Review of Agricultural Economics Malaysia* には、Low Wan Kim, “Fish Marketing in Malaysia,” Vol. I, No. 1 (1967), pp. 28-33; G.R. Elliston, “The Role of the Middlemen in the Fishing Industry of West Malaysia,” Vol. I, No. 2 (1967), pp. 16-33. などの論文がある。後者はとくに仲買人の分類を目指した好論文である。

ない。

Perupok は19世紀後半までは農主漁従の内陸集落（海辺地方）であったが、1920年代から1930年代にかけて漁主農従あるいは専漁業の漁家が海岸部に浦方集落を形成したものである。人口のほとんどはこの土地で生まれたマレー人から成る等質的な社会で、他出の傾向も見られないという。成人男子の約75%が漁師、10%が魚商人である。漁業そのものが交換経済的性格を有しているため、必然的に内陸後背地との交渉、海岸線沿いの交渉など外部との経済的関係が常に存在する。特に注目されるのは女性の経済的地位が高く、漁具などへの投資に関しても大きな影響力を与えるという。（p. 80, p. 128, p. 144）

Perupok では8種類の漁法が行なわれているが、どの漁法を採るかは（1）季節風などの自然的条件、（2）生産高と資金とによって支配される経済的条件、（3）人の気持、親類、友達関係などに左右される社会的条件、などによって決定される。

もっとも盛んに行なわれるのは四ツ張網（pukat takur）で、5隻の船が必要である。親にせ餌を使って魚群を集めておき、魚群が集まっていれば、4隻の船は網を張って待ち、他の1隻はその親にせ餌を沈めて、今度は子にせ餌を繰り出し魚をおびきよせて網を上げる。このにせ餌を扱う船には juru selam（もぐり師）と呼ばれる漁の熟練者が乗っており、魚群の種類や大きさの判定を水の中に潜って音で判断し、全体の指揮をとる。魚を捕えると、こんどはこれを陸に運ぶ船が必要になる。これは魚商の船（perahu peraih）と呼ばれる。

juru selam というのは、この網漁の中心人物で、しばしば網グループの主たる資本を出資している。彼が漁の計画、組織、漁の指揮を行なう。彼のグループに沢山人が集まるかどうかは、彼の網の生産高によることが多

い。彼と船子との関係はリーダーシップの力によって結ばれていて、一定の契約関係がないからである。いっばんに網グループの成員は、中心となる船主とその親戚、親友、近隣者などの中核を除いて、メンバーの出入りが激しい。また網グループに参加する船も、同一シーズン中でも、出ていったりする。（第4章、漁業活動の計画と組織）

船、網、漁具などに投下される資本は、漁師一人あたり約55マラヤ・ドルと計算されている（p. 132）。船を所有している漁師は33%、網を所有しているのは約60%である。資本投下の個人差、資金のやり繰り、漁具製造および維持費、網製作の企業などに第5章の残りがついやされている。

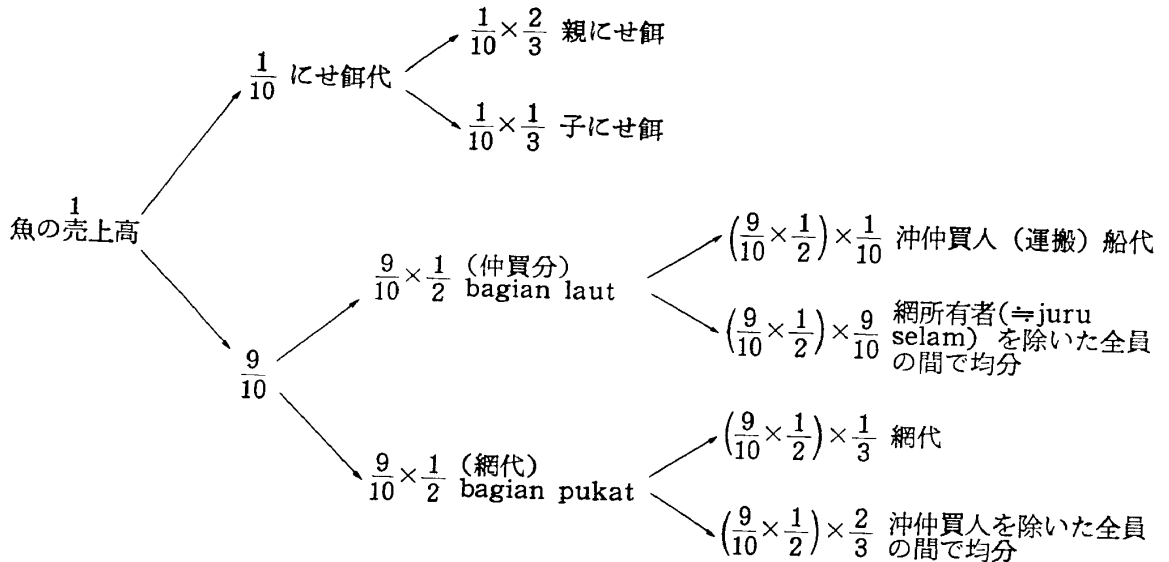
第6章は信用制度がどのように利用されているかについて、利子のつかない貸借、金利のつく貸借、担保の用益権という形で利子を払う借金などが記述されている。

市場制度（第7章）は、専業漁家にとってはもっとも重要なことである。仲買人は沖仲買人と浜仲買人とにわけられ、沖仲買人は網グループと一緒に出漁して、運搬船の役を果たすわけである。浜仲買人は、まずその人数が過剰であり、出入りが激しく、兼業が多いことが特色である。卸売仲買人の外に、魚行商人（てんびん棒、自転車）、小魚商も水揚げされた魚の売買に参加する。

漁獲の分配方法（第8章）は、いろいろな要因があって複雑であるが、四ツ張網の場合の原則は図のように歩合制である。これに役付き代とでも言うべき特別配当が加わったり、家庭消費のための配給をしたり、分配率が網元によって変えられたりする。網を持っている juru selam は（にせ餌も彼の責任なので）20～35%の配当を受け、運搬船主は約6%、普通の船子是一人当たり約2%の均分配当ということである（p. 246）。

第9章は、市場値段から逆算された漁業平

図 漁獲物の分配方法



均純収入とその個人差が推計されている。第10章は約1/3強の兼農漁家などの副収入をもいれて漁家の生活水準全体を考察している。1910年頃から40年までの30年間に貧富の差が広がってきていて、階層分化が教育面などに現われてきているとしている。

この集約的調査のデータは、Firth 自身が毎日、漁に行く（各漁法毎の）船の数、船子の構成、水揚げ高をたんねんに記録していった集められたものである。6カ月間とはいえ、これだけの記録を正確に集めるのは並大抵ではない。その上に、漁家経済を知るために、222筆の水田の稲作生産高、64区画の野菜生産高、10世帯の家計などのサンプル調査と、331全世帯の経済全般にわたるセンサスをも行なっている。これらのデータを使っの積み上げ方式による逆算の仕方は、まことに着実だと言わざるを得ない。

以上が、本書の核をなし、かつ初版、改定版を通じて不変の部分である。次に改定を加えられた第11章および巻頭の2章について触れておく。

第11章は初版では「漁業の発展とマレー農

民」と題されていたが、第2版では「近代的発展—23年後の再調査」とされている。1947年には四ツ張網の分配方法が網元に有利なように変わる徴候はあったが（1/3から1/2へ）、全体として技術的な変化もなく戦前とあまり変わらなかったと言える。

ところが1963年には、発動機と氷とが村人の意思によって導入されて、生産、市場状況をともに大きく変えてしまった。機船漁業は従来の四ツ張網を衰退にやり、漁灯を使用する巾着網漁を盛んにした。このため生活のサイクルがくるい（例えば昼漁から夜漁への変化）、マーケティングの方法も変わり、従来の浜仲買人に代わって大規模な資本家的魚商人が出現しだした。そしてこれら企業者（マレー人）と他の漁師との格差はますます拡大することになる。1940年には、装備に対する経費は全収入の10%、資本（船、網）に対する還元は27%、労働報酬は60%であったのが、1963年には、各々25%、30%、40%となっている（p. 323）。

このようにマレー人コミュニティの内部での階層分化が、企業家（orang kaya）と残り

の村人との間でいっそう進行していつていると言う。この地区では、中国人が直接漁業に介入してきていないのもその促進原因の一つではなかろうか。

さて、本書の最初の章は、漁業経済とマレー村落社会と題して、“peasant”の特質、あるいは漁民と農民との相違などを述べている。注目すべきは、「イスラームは例えば1940年よりも1963年のほうが漁師の生活の中でより顕やかで形式的な役割を果たしている」(p. 12)という指摘である。この点は、1963年の調査時期が、マレーシア独立後最初の総選挙の前であり、その総選挙で全マレーシアイスラム党が勝ったというクランタン州の事情も考慮されるべきであろう。

漁師の収入は戦前と比べてみても、その経済的地位はゴム採液労務者と変わらない低所得者層にある。一方では鮮魚の需要などが増し、漁師1人あたりの生産高も増加しているにもかかわらず生活水準が低いのは、生産高における格差がいっそうひらいていて、低い生産者は戦前とあまり変わらない生産性を維持していることと、また、たとえ生産性が質量ともに向上しているとしても、マーケティング制度が魚商人に統制されている場合は、魚商人による搾取が増加するだけのこともあるからであるとFirthは言う。

第2章は、海岸線の長いトレンガヌ州と、海岸線が短く後背地の豊かなクランタン州の漁業経済全般(漁業人口、漁獲量、船、漁具、資本、金融など)にわたる比較である。船、漁具の図解、漁撈技術の解説など、テクノロジーの領域に入ることも詳しく記述している。

人類学者の常として定着した村だけを抽出してしまうことが多い。この点Firthは、村落とより大きな国家とを結ぶ中間項として地域全体の概要を述べていて、読者にとってはまことにありがたい。微視的な村落調査の結果が、どの程度一般化しうるかを推察できる

からである。しかし、村落調査と全然関連のでてこない国家レベルの統計などを継ぎ足しても意味がない。(この悪例は前掲Tjao Soei Hock, 1963)。少なくとも、村落を含む広域の地域社会における調査村の位置づけが読者にわかるようにしたいものである。この点、Firthの著書の第1章と第2章は、一見重複するような点もあるが、今後の調査報告の例として有益である。

もし読者がマレー人の村の中に沈潜していくつもりでこの書物を手にすれば、非常に興味ある本である。随所にフィールド・ノートからの素材がもりこまれている。実際の事例、調査時の会話、調査上の困難などが、そのまま読者に提示されているわけである。これは逆に言えば、せっかちな読者にとってはまことに読みづらいものであろう。ともかく、根気の良いデータ集めには、ただ頭を下げるしかない。調査期間が比較的短かったせいもあって、調査のし残しが目につく。(例えば夫妻間における財産の分布)。これも不明の所ははっきり不明と書いてあるから余計気になったのかもしれない。

decision-makingにおける要因を究明する時に、「社会的」要因に、しばしば心理学的な要因が暗に含まれていることがある(前述、漁法の選択条件参照)。心理学的要因を「体系的」に分析の中に取り入れるか、取り除く必要があると思う。全体として、この書物は基礎的な知識として蓄えられるべきで、これからが社会学的²⁰⁾、人類学的、経済学的な分析の始まる点ではないかと思う。

(前田成文・東南ア研)

20) 山岡栄一『漁村社会学の研究』1966。河岡武春「マラヤ漁村にかんする覚書」『アジア経済』10巻5号(1969年5月) pp. 69-82 参照。

図 書 紹 介

Kiyoshi Takimoto (ed.) *Geology and Mineral Resources in Thailand and Malaya*. Reports on Research in Southeast Asia, Natural Science Series N-3; Kyoto: The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, 1969. iv+160 pp.

本書は京都大学工学部の滝本教授（本年3月定年退官）を中心とした東南アジア研究地学班の人たちが、1964年から1967年にかけて、タイとマラヤの地質と鉱床について行なった研究の成果をまとめたものであって、今回センターから Natural Science Series N-3 として刊行されたものである。

本書は下記の通り4章に分かれ、第3、第4章はそれぞれ、さらに4部、2部に分かれている。

- I タイおよびマラヤの地質・鉱床総説
滝本 清・鈴鹿恒茂
- II タイ中央平原における第四紀層露頭
高谷好一
- III 鉱産資源
 - 1 タイ北部の螢石鉱床 滝本 清
 - 2 マラヤの鉄鉱床 鈴鹿恒茂・港 種雄
 - 3 マラヤの錫鉱石の研究
滝本 清・森山徐一郎
港 種雄・鈴鹿恒茂
 - 4 マラヤの稀有金属鉱物
森山徐一郎・滝本 清
港 種雄
- IV 物理探鉱 吉住永三郎・谷口敬一郎
入江恒爾
 - 1 タイ・マラヤにおける予察調査
 - 2 マラヤにおける調査結果

次にこれらの内容を簡単に紹介しよう。Iはタイとマラヤの地質と鉱床のあらましを述べたもので、本書の序論をなすものである。タイの鉱業は近年になるまで、半島部とカンチャナブリ地方、メホンソ

ン地方の錫・タングステン鉱床に限られていたが、約10年前から中部と北部で錫・タングステン・マンガン・アンチモン・鉛・鉄・螢石・石膏・褐炭の鉱床が開発されている。マラヤの最も重要な鉱床が世界一の砂錫鉱床であることはもちろんであるが、それに次いで鉄鉱床がある。

IIは著者が東南アジア研究センターの助教授になる前に、1966年8月から翌年5月まで10カ月間、研究生としてタイに滞在し、専念した野外研究の成果を整理したものである。著者はさらに、その成果の概要を、同じころバンコクにいたソ連のアレキセーフ博士と連名で発表*したことがあるが、今回の報告は詳報であるとともに、前報での結論の一部を訂正している。

タイの中央平原は南北の長さ 500km、東西の幅 100km におよぶ。著者高谷好一博士は、中央平原の発達史を研究するために、中央平原を構成する沖積第四紀層の露頭を追って平原の全域にわたって克明忠実な野外観察を遂行した。観察した露頭の数は数えきれないが、本書ではそのうち代表的なもの140の露頭について、多数のスケッチ・断面などを使って克明な記載をしている。

著者はこれらの記載に基づいて、中央平原の第四紀層を下記の通りに区分する（新しいほうから）。

- (1) 氾濫原堆積物（おそらく有史時代のもの）、(2) 第1層（現河川ぞいにのみ存在するローム質の完新世沖積層；わずかに風化して鉄結核ができています）、(3) 第2層（粘土質の更新世沖積層；風化進み酸化鉄の豆石大の結核ができています）、(4) 第3層（第1、第2層と違って、河沿いだけでなく、分布広い；砂質沖積層で、風化進み、ラテライトの薄層で被われる）、(5) 第4層（分布狭い；風化進み、ラテライト層に被われた砂質沖積層）、(6) 硬くて厚いラテライト層（中央平原周縁の古期岩層からなる丘陵上の準平原を被う；準平原には高位と低位の2種があり、低位のものを更新世、高位のものを鮮新—更新世としている）、(7) 石灰質堆積物（上部古生代、ラトブリ石灰岩と密接に関係あり；上記の第2層より古い）。第1層から第4層までは、平原辺縁部で

* M.N. Alekseev and Y. Takaya, "An Outline of the Upper Cenozoic Deposits in the Chao Phraya Basin, Central Thailand," 『東南アジア研究』第5巻第2号, 1967.

は順次に高くなる各自別個の段丘を作る。そのうち第4層は著者が今回つけ加えたもので、その段丘は疑わしいという。

Ⅲ-1 はおもに著者が北タイの山地にある2大螢石鉱床、ドイタオ（チェンマイの南130km）とバンホン（チェンマイの南82km）を、それぞれ1960年と1964年に調査し、帰ってから室内研究をした成果を述べたものである。ドイタオは白雲母花崗岩中の気成-熱水裂隙充填鉱床で、バンホンは千枚岩質板岩と石灰岩中の熱水交代鉱床である。室内研究にはX線粉末回折分析、X線螢光分析、スペクトル分析などが使われた。なおタイの螢石鉱床は1959年頃から急激に開発された。

Ⅲ-2 は著者らが1964年に行なった現地調査とそのあとの室内研究の成果を述べたものであるが、おもに調査したのは、ジョホール州のシンパンルンガム、ジョラク、レンガの3鉱床とイポー付近のペラク鉱床である。顕微鏡観察、化学分析、X線粉末回折分析、X線螢光分析による精細な室内研究の結果は丹念な野外観察の結果と相まって、これらの鉱床には種々な相異はあっても、いずれも接触交代および（または）熱水起源であることを示している。

Ⅲ-3 は著者らが1964~1966年のあいだになした現地調査で採集した錫鉱試料や某社から得た試料について行なった鉱物学的研究成果を主として述べたものである。試料の産地はマラヤの主要産地を網羅している。Sn 75%の精錫鉱をまずふるい分けてから等磁力分離機で分離したものを光学顕微鏡、X線粉末回折、X線螢光分析、スペクトル分析などによって精細に調べて、少数成分鉱物と含有微量元素を明らかにした。少数成分鉱物にはハットナイト？、イルメナイト、モナザイト、タンタライト、ゼノタイム、ジルコンなどが、微量元素には Y, Zr, Nb, La, Ce, Nd, Sm, Gd, Ta, Th, U などがある。

Ⅲ-4 は、1966年にマラヤの20カ所の錫選鉱場から集めた amang（マラヤの言葉で、錫鉱石から重力選鉱で錫精鉱を採った残りをいう）試料を磁力分離機で分離し、X線粉末回折分析、X線螢光分析で識別した鉱物と元素の種類を報告したものである。それらには産地の地質や選鉱場の設備によって大きな違いがある。

Ⅳ-1 は、タイとマラヤで実施するに適する物理

探鉱の方法を選ぶために著者らが1964年に試みた予察について記述したものであって、30日におよぶ現地調査の結果、次の結論に達した。すなわち、(1) 東南アジアには鉄鉱が広く分布すること、(2) 鉄鉱は日本にとって重要な輸入鉱石であること、(3) 現地の技術者が容易にできる方法であること、(4) 費用が比較的安いこと、を理由として磁力探鉱を主にすることにした。場所としてシンパンルンガム地区、ジョラク地区、レンガ地区、ホースシュー地区（いずれもマラヤ）が選ばれた。

Ⅳ-2 は上記の予察に基づいて翌1965年に著者吉住教授らによって実施された磁力探鉱の報告である。シンパンルンガム地区で磁力探鉱が行なわれたのは最初であったが、既知の鉱床の分布と磁力異常との間に明らかな関係があることが証明された。ジョラク地区では、2個の既知鉱床の中間に3個の磁力異常帯が発見された。ホースシュー地区では、磁力異常は弱いが、かなり大きな鉱床の存在が推定された。またこの調査でマラヤ北部の鉄鉱床地区の磁気異常が南部のそれよりかなり弱いことが知られた。

以上が本書の内容の概要である。タイやマラヤの地質鉱床について書いた論文や単行本は少ないとはいえないであろう。マラヤには古くから地質調査所があって、地質鉱床に関する調査研究を行ない、その成果を刊行してきた。また第二次世界大戦の直前から機運があったマラヤ、タイの古生界の層序・化石の研究が戦後再開され、日本人研究者もそれに参加して多くの発見がなされ、それらの成果が論文・単行本として発表されつつある。しかしながらタイ、マラヤの鉱床について、新しい方法・設備を使って広範囲に調査研究をした例は、本書で発表されたものを除いては少ないと思われる。また高谷博士によるタイ中央平原の第四紀層の研究は他に類のないユニークなものである。これらの新しい貴重な研究成果を内容とする本書が内外の東南アジア地質鉱床研究者に欠かせない指針となることは間違いない。本書の刊行を東南アジアの研究と開発のために祝したい。（松下進・京大名誉教授）

Atsushi Kobata and Mitsugu Matsuda. *Ryukyuan Relations with Korea and South Sea Countries—An Annotated Translation of Documents in the Rekidai Hoan*. Kyoto: A. Kobata, 1969. xii+215 pp.+153 pp. (plates)

14世紀末から16世紀初めにかけては琉球船の諸国への通交貿易が極めて活発に展開せられ、琉球が日本・朝鮮・中国と東南アジア諸国との間の物資交流の中継国となって非常に繁栄した時期であった。本書はこの時期の琉球と朝鮮および東南アジア8カ国とのそれぞれの関係史について概述するとともに、この問題の研究のための根本史料である歴代宝案中の関係文書の大部分を全文英訳して提示し、かつそれに詳細な注を付したものである。

著者小葉田淳博士（京大名誉教授、本年3月退官）は戦前台北帝国大学（現中華民国国立台湾大学）に在職中から琉球の外交史に大きな関心を持ち、早く『中世南島通交貿易史の研究』（1939）を著わすとともに、戦前、沖縄県立図書館に蔵された歴代宝案の原抄本の写本作成にも尽力した。この写本が現在の国立台湾大学所蔵本歴代宝案である。博士は1962年、そのマイクロフィルムを所蔵するハワイ大学東西文化センターに招かれ、歴代宝案の研究に従うことになったが、その際、計画・着手されたのが本書刊行事業であった。本書の原稿は小葉田博士がまず全体の日本文原稿をつくり、それを琉球大学講師の日系米人松田貢氏が英訳して数年前完成されたが、この度小葉田博士の手によりようやく刊行されるに至ったのである。

本書の本文は(1)琉球・朝鮮関係、(2)琉球・シヤム関係、(3)琉球・マラッカ関係、(4)琉球・パレンバン関係、(5)琉球・ジャワ関係、(6)琉球・スマトラ関係、(7)琉球・スンダ=カラパ関係、(8)琉球・パタニ関係、(9)琉球・安南関係の9節から成り、各節には最初に数ページの概説があり、宝案文書の英訳文と注がこれにつづく体裁がとられている。各節に載せられた英訳文書の数(1)18、(2)37、

(3)19、(4)10、(5)6、(6)3、(7)2、(8)1、(9)1、計97で、関係文書総数127の約2/3に当たり、他はほとんど同文などのため省略されたのであるが、それらの原文は本書末尾の写真版によって見ることができる。宝案文書の訳出に当たり、著者が最も苦心したのは物産名であり、その難解なものについては、古今の諸文献を比較検討するほか、産地の現在の物産を調べ、産地の人に問うなどしてようやくして推定を下したという。それらのうち薔薇露水・香花紅酒・上水花布・密林橋香白酒・好三連打布・別布好咭・山南八好咭・啫哪哩など8種の南方物産については「付録」として詳細な研究を掲げた。

最後に本書の価値を一段高めたものとして末尾に付加された153ページに達する関係文書全部を収める宝案の写真版をあげねばならない。これによって読者は文書の英訳文を原文と対照させて研究しうるばかりでなく、本書を通じて原文書そのものの利用をも可能にしたといえる。本書は標題のいかんにかかわらず、大部分が東南アジア関係の記事によって占められ、かつ訳出掲載された文書は同時代の東南アジア史料の欠を補う貴重なものであり、この意味において本書は東南アジア史研究者にとって必見の書と言えるであろう。

（藤原利一郎・京都女子大学）

Klaus Wenk. *The restoration of Thailand under Rama I, 1782-1809*. Tuscon: The University of Arizona Press, 1968. xi+149 pp.

本書は、現ラタナコーシン王朝の創始者であるプラプッタヨートファ王、ラーマI世の時代史である。題名の「タイ国の再興」は、著者が、同王の治世を、1767年にタイの被ったビルマ侵略軍による徹底的破壊からの復興の時代としてとらえたことによる。「王国の一時的破壊は外因によってもたらされた事件であった。もちろんそれは大変災ではあった。にもかかわらず、それはタイ国史の一時代を区切るほどの大変災とは言えない…。国内政治の復興、失われた旧版図の回復などの事業は、アユタヤ時代の内

政・外交の枠組を変えることなしに遂行された。」(p. 122)バンコク時代と呼ばれるタイ国史上の新しい時代は、かくして、「明確な断絶ないしは変移の一线を画することなく」(loc. cit.) 開始されたのである。著者 Wenk は、I 世王の登位をもって、いわゆる “new Siam” が始まるとする通説をしりぞけ、“in a very hesitant way” という留保をつけつつも、モンクット王の治世をもって近代タイ国の開始の時期としている。

本書はその前半において国内諸制度の復興につきのべ、後半はもっぱら旧領土の回復戦役を含む対外関係の記述にあてられているが、史料の関係もあってか、力点は後者におかれているように思われる。前者のテーマについては、つとにターニ親王のモノグラフ “The reconstruction of Rama I of the Chakri Dynasty,” *JSS* XLIII: 1 (1955) が発表されているが、本書の記述は、「パタルン年代記」「ナコンシータマラート史料」などによる、地方行政組織の叙述があるほかは新味に乏しい。今後「三印法典」などの根本史料を利用しての、さらに精緻な研究の出現がまたれる。

対外関係は、本書の中心部分をなすもので、主としてタイ語およびラーオ語史料によって、ビルマ戦役とその終結、ラーオ諸国、マラヤ土侯国およびカンボジア征服の過程があとづけられている。安南および西欧諸国との交渉史は簡潔な記述にとどまる。

1957年に Walter Vella がタイ語文献を駆使してラーマ三世王時代史 *Siam under Rama III, 1824-1851*. (New York, 1957) を発表して以来、ラタナコーシン史に対する関心はとみに高まり、今日までに、IV 世王年代記の全訳 Chadin Flood (tr.) *The Dynastic Chronicles Bangkok Era, The Fourth Reign*. 4 vols. Tokyo, 1965- , V 世王にかんするタイ語文献を訳編した Prachoom Chomchai, *Chulalongkorn the Great*. Tokyo, 1965. など、タイ語史料による研究が次々と刊行された。今回 Wenk の労作が世に出たことによって、ラタナコーシン王朝の最初の5王の研究が、II 世王をのぞき、ことごとく英語で利用可能の状態となったことを喜ぶたい。

(石井米雄・東南ア研)

National Family Planning Board,
Malaysia. *Report on the West Malaysian Family Survey, 1966-1967*.
Kuala Lumpur, n.d. xlv+534 pp.

開発途上国の人口増加はきわめて著しく、それぞれ深刻な人口問題を生み出している。マレーシアも例外ではなく、約3%に及ぶ増加率が記録されている。このような事態を背景に、この国の主要部 West Malaysia (マレー半島部) における出生力の動向をさぐるために、West Malaysian Family Survey が行なわれた。この調査はマレーシアの National Family Planning Board とミシガン大学の Population Studies Center とが協力して、1966年末から1967年はじめにかけて実施した。

報告書は四つの章および Appendix からなる。第1章から第3章までは調査方法の解説および調査結果の要約にあてられ、第4章では345ページを費やしてぼう大な量の集計表が示されている。Appendix A には West Malaysia 全域を対象として、各質問に対する解答の実数が示され、Appendix B には調査に用いられた質問票が、Appendix C には調査員に対するインストラクション、Appendix D にはコーディングに関する説明がおさめられている。

この調査の対象は15~45才の既婚女性で、サンプル数は5,457である。サンプリングおよび集計の主な関心は、大都市、町、村落という三つのグループにおける差異にむけられている。この国における生活状態を規定しているもう一つの重要な要素である民族による差異が、政治的な理由からか、あるいは調査企画者の不注意からか、十分に扱われていないことは、調査の価値をやや低めているといわざるを得ない。質問票は300以上の質問項目を含み、非常に意欲的なものであるが、この種の調査としてはやや欲張りすぎたきらいがないでもない。とはいえ、この報告書は、この種のデータに乏しい開発途上国の出生に関する現状および態度を知るためきわめて重要な資料といえよう。

(坪内良博・東南ア研)

Paul Lewis. *Akha-English Dictionary*. Data Paper No. 70, Ithaca: Southeast Asia Program, Dept. of Asian Studies, Cornell University, 1968. xxiv+363pp.

東南アジア（特にタイ国北部）における少数民族言語は俗に「未調査言語」と呼ばれてきたほど、資料の乏しいものであったが、先に紹介したヤオ語の辞書にすぐ引き続きこのアカ語の辞書が出版されたことを見ると、これらの言語ももはや「未調査」の言語ではなくなりつつあると言わねばならないだろう。著者は1949年から66年までビルマのチェントンのパンワイ（Páwè）で宣教師をしており、その間に集めた資料を辞書にしたものである。さすがに長年月を費やしただけあって、見出しの数だけで7100、複合語その他の類を差し引いても4000語くらいを含む、誠に立派な辞書である。本書のアカ語は“Jeu. g'oe. Dialect” (/jəxǝ/) であり、私の調査した北部タイのアカ語と比較してみると、初頭子音に関しては、Saenchai 村の Amya 氏その他により代表されるタイプのアカ語にもっとも近く、ほとんど相異点は見られない。中核母音、末尾子音においては、わずかな違いが見られるだけで、大差はない。ただ、本書に述べられている母音音素 <oi> /ü/ は、私の調査したいずれのタイプにも見出されなかった。また、<ui> /i/ と <eu> /ə/ との対立は本書に示されているほど明確ではなく、不安定である。ビルマにおけるアカ語ではあるが、そのまま北部タイでも通用することには疑問の余地がないだろう。声音も目立った相異はない。

本文の他に、“Introduction” と “Appendix” があり、後者は命名法、儀式名、時間（日名、月名など）の説明であり、前者は “Phonology” と “Grammar” の概略である。“Phonology” は同じ著者の論文 “Akha Phonology,” *Anthropological Linguistics*, Vol. 10, No. 2 (1968) と同じである。氏の記述の特色としては、母音音素に “Laryngealized” と “Oral” の2系列を認めていること、および [ɔ] を /ɔŋ/ と解さずに /a/ <ah> と言う独立した一つの母音音素とみなしていること

があげられよう。前の点については、母音に2系列を立てるよりも、“Laryngealization” を声調類 <˩, ˨> に伴う自動的特徴とみなすほうがよいと私は考えるのであるが、後の点については、方言の相異自体に原因するとも考えられるので、本書の通り /a/ <ah> としておいても良いだろう。“Grammar” は造語法 (“Word Formation”) の説明であり、短い簡単なものであるが、アカ語の特徴を非常によく捉えていると思う。また本文においては、見出し語とその他の要素との結合形があげられている場合には、結合形の訳語は与えられていない。例えば、<g'o. -eu> 《to return》の項には、他の要素との結合形として、<g'o. la~eu, g'o. le-eu, g'o. le~eu, g'o. i~eu> 《(下方から上方へ) 帰って来る、(上方から下方へ) 帰って来る、(下方から上方へ) 帰って行く、(上方から下方へ) 帰って行く》が挙げられているが、この項にはこれらの訳語は付されていないのである。これは一見不親切なようだが、使用者はそれぞれ <la~eu, le-eu, le~eu, i~eu> の項を探したのちに、自分で二つの要素を総合して意味を理解することになるから、このほうが言語構造をより有機的に理解することになり、より親切な方法と言えるのである。

本書の表記法は、ビルマにおける宣教師により用いられてきた、ローマ字によるそれであるが、音素体系と規則的に対応し、かぶせ音素の表記がないことを除けば、ほとんど音素表記そのものと言っていいほどであるから、言語そのものを研究する人にとっても、またアカ語を用いて他の分野の仕事をす

る人にとっても、非常にありがたい価値ある書物なのである。本書の表記法を *Ma. Ku[˩] neh bo. eu gui. lah. daw.*, The British and Foreign Bible Society, Rangoon (1955) のそれとくらべると、前者における <py, by, my> が後者では <pl, bl, ml> となっている点以外には違いはない。これは両者の対象とする方言の相異に起因する可能性があり、興味深い点である。

アカ語の最も面白い特徴は造語法（形態論）にあると思われるが、その点本書は余すところなく記述しており、非常にすぐれた本で、この分野の研究者にとって欠かすことができないものと言えよう。例えば、<a. za. shi~eu> 《豚が死ぬ》という

ような文を記録するのはたいして困難ではないが、同じ意味でも、〈a, za, za, shi, shi-eu〉《豚が豚の死を死ぬ》といったような例を記録するのはなみたいていのことではないのである。

本書およびその他のタイプのアカ語については、後により詳しく述べるであろう。

(桂 満希郎)

Pisanu Intrakomhaeng. *Thai for Foreigners*. Bangkok, 1968. (個人出版) iv+327 pp.

タイ語の優れた入門書に対する要望が高まりつつある折から本書が出版されたことは、また一つの喜びとせねばならない。まず本書の構成を見ると、“Phonology” “Morphology” “Key to the Tones”の項目の下にそれぞれ概略的な説明がなされ、ついで34課から成る本文であるが、第16課の後には“Syntax”，第34課の後には“Orthography”の説明があり、これだけが“Part I”となっている。“Part II”は合計33課あり、すべて絵を使つての“Pattern Drills”である。“Phonology”は根本的には Haas のそれと変わらないが、異なる点は Haas の /j, y, ua, ia, ya/ がそれぞれ /y, i, uə, iə, iə/ と表記されていることのみである。例えば /rə/ 《(疑問)》, /khám/ 《彼》などのように、文字にとらわれずに、実際に話されている通りを表記している点は非常にすぐれているが、その反面、音素と文字との混同が見られるのは解せない。例えば 〈bhala〉は /phon/ であるが、文字にとらわれて /phol/ と表記するなどである。それならば 〈kaara〉は /kaan/ ではなく /kaar/ としななければならないのではないか。“Morphology”はごく簡単で、“Prefixes, Infixes, Suffixes”があげられているだけである。後2者については問題ないとして、“Prefixes”において、/fák, lûuk, kaan, khwaam/ が /pra-~pa-, kra-~ka-/ などと同列に扱われていることは、大いに疑問を感ずる。声調は本書の説明で充分であるが、実際に教室で使用するとなると、別に練習用のシートを使って補足し

なければならないだろう。第1課→第34課は“Dialogue” “Notes” “Pattern Drills” から成るが、量は他の本にくらべて少なく、教室で使った場合は2時間で終了すべきである。“Part I” “Part II”を合わせて67課あるから、1週に10時間(1日2時間で5日)とすると、だいたい14週間(3カ月半)で本書を仕上げることができる。内容から見て、日常の用を足すに不自由しない程度の基礎的な文しか出てこないから、本書にこれ以上の時間をかけるのは適当ではないが、短期間にタイ語の基礎的な語彙と構文とをのみこむには向いているであろう。本書の構文はすべて、Transformational (=Generative) Grammar にもとづいたもので、少ないスペース内に、かなり能率よく必要な構文や造語法を網羅しているが、初心者あるいは言語学の予備知識のない人達にとっては、変形文法の用語や等式の類をあまりにも強く打ち出しすぎており、むしろ奇異な感をいだかせるかもしれない。“Syntax”はすべて上記変形文法により説明され、英語と対照されていて、よく出来ていると思うのであるが、変形文法を心得た教師により説明されなければ、本書の価値を充分に利用することができないであろう。欠点としては、(1)語彙がかなり高度なものを含むにもかかわらず、構文はあまり程度の高いものではないこと、(2)ミスプリントの多いこと、(3)1冊にあまりいろいろなことを押し込みすぎたこと、(4)各課の量が不釣りあいであることなどがあげられよう。他の本である程度習ってきた人が、知識なり理解なりをさらに確かなものとし、タイ語の文法を把握するために、本書を課外用に使用するほうが適当であろう。次に、タイ語を実用的に学習しようとする人以外に、言語学的にタイ語の文法構造を記述しようとする人にとっても本書は役に立つと同時に、興味を引くものとなっている。変形文法の立場から、タイ語を分析した本はほとんどないと言っていいほどであるが、本書に示された P(hrase) S(tructure) Rules および T(ransformation) Rules を詳細に検討することにより、著者のタイ語に対する記述方法をかなり知ることができる。なお、“Thai for Foreigners”は「Thai for Foreigners whose mother tongue is English」の意であることをつけ加えておく。

(桂 満希郎)

Chinnawoot Soonthornsima. *A Macroeconomic Model for Economic Development of Thailand*. Bangkok : Thammasat Univ. Press, 1964. viii + 155pp.

本書は、1963年にミシガン大学へ提出された博士論文であり、タイ国経済に関するマクロエコノメトリックモデルを構築し、それを開発政策に応用することをその目的としている。実行性のある経済開発計画を立案するためには、経済諸変数間の相互依存関係が詳細に分析されていなければならない、そのための一つの方法として、経済開発計画に適した数量的マクロモデルを作ることが考えられるであろう。本書は、タイ国経済に関してそのようなアプローチを試みた最初のものであり、当時進行中であった第一次開発計画（1961～66）が、質的分析、直観、そして時には全くの推測に基づいていることを批判して、より厳密な数量的な取り扱いが可能であることを示唆しようとするものである。

本書の構成を簡単に述べておくと、まず第1章のイントロダクションで、研究の一般的背景、研究の目的・見通し、データ源等に言及し、第2章で非経済的背景を地理的、歴史的、政治的、社会的観点から叙述する。第3章では、一般的な経済条件として、タイ国経済が自由企業経済であることを強調した後、農業、工業、財政、金融、外国貿易、経済開発の諸項目を検討する。さらにそれまでの議論をふまえた上で、第4章においてマクロエコノメトリックモデルを構築し、第5章でその応用、すなわち、財政政策、金融政策、短期経済開発、長期計画のそれぞれに対するモデルの応用を示す。第6章で質的政策と量的政策の関連を略述した後、第7章で全体的な評価を加えている。

本書の構成は以上のようなものであるが、その主目的がモデルビルディングとその開発政策への応用にあるので、この2点について少し詳しく述べておくことが必要であろう。モデルの特徴としては、開発計画の検討を目的としているために、外国貿易、外国からの借款および援助を陽表的に含んでいるこ

と、政府部門と民間部門が明確に分けられていることをあげることができる。モデルは支出面を中心として、貨幣供給函数、生産函数を含む19の方程式（定義式も含む）よりなる部分的な同時方程式体系をなしており、生産函数が実質表示であることを例外として、残りはすべて名目表示の関係式であって、実質GDP（国内総生産）と名目GDPとは物価水準でリンクされている。また、生産函数がラグを伴った定式化であるため逐次決定型の体系となっている。データ・スパンは1952～60の9年間で、決して大標本と言えないが故に、通常の最小二乗法が推定法として採用されている。輸出函数をトレンドだけで説明するというような強引な所もあるが、概して説明力は良好であるように思われる。このようにして推定されたモデルに基づく開発計画の検討は以下のごとくである。まず、人口成長率が3%でありかつ1人当り実質消費が前期より小さくはならないという制約の下で、実質GDPの成長率を6%にするという目標を達成するためには、短期数量的経済政策がいかにあるべきか、すなわち、政策変数（外国からの借款、政府の中央銀行からの借入れ、政府税収入）の可能な値の範囲はどうかの問題についての解が与えられる。さらに、構造変化なしとの非常に厳しい単純化の仮定の下で、タイ国経済の成長モデルが導出され、長期計画における政策変数決定の可能性が示されるのである。

最終的な結論として著者は、統計資料の制約にもかかわらず、計画に役立つマクロモデルの構築が可能であること、本書が開発政策決定の際のモデルの利用法を例示しえたこと、さらに進んだ数量的研究の基礎として本書が役に立つであろうこと、等の評価をあげている。このように、本書が、タイ国経済に関するモデル分析の一つの例であり、データの整備とともにさらに改善され補完される必要のあるものであることは確かなのだが、それにもかかわらず、アイディアに富んだ内容は、タイにおける先駆的試みであるという事実と相伴って、本書を誠に興味深いものにしてしている。また、著者があまりにも質的直観的すぎると批判した開発計画が成功であったという事実も、決して数量的分析の重要性を減じさせるものでないことは強調されてよいであろう。

（江崎光男・東南ア研）

福地崇生『インドネシア経済の計量
経済学的分析』アジア経済研究所、
1966. iv + 398 pp.

本書は、現状で利用可能な微視的・巨視的資料を統括使用する総合的なエコノメトリックモデルを作成して、1950年代のインドネシア経済の変動の説明と、1970年までにいたる種々の条件につき予測を行なうことを目的としたもので、日本、インド、フィリピンと続いた一連のアジア諸国経済研究の一環をなすものである。

著者は、インドネシア経済の特質として、(1) インフレーション、(2) 製造業における低操業率、(3) 供給天井型経済、(4) 輸出の停滞およびそれに付随する外貨問題、(5) 資本不足、(6) 低所得水準の諸点をあげ、これらの要素を考慮に入れたモデルビルディングを試みている。その際、「拡大法」と称される特殊な手法が採用されていることは、本書の著しい特色である。「拡大法」とは総合モデルを作成する場合、まず小規模のプロトタイプモデルから出発し、しだいに大規模なマクロモデルへ「拡大」発展させ、最後に総合モデルに至らしめるやり方をさしている。まず戦略モデル（プロトタイプモデル）を作成し、それを足がかりにして総合モデルに取り組む手法は、一般に広く知られた方法であるが、これはその特殊なかたちのものと考えてよいであろう。

本書では、総合モデルに至るまでに、二段階すなわち2個のプロトタイプモデルが考慮されている。第1のモデル（マクロモデルⅠ）は、内生変数13個の小規模なもので、二段階最小二乗法に基づいて推定されている。デフレーターが内生化されていること、民間消費が定義式から求められていること、軍事費が政府支出から独立させられていること等に特色が認められるようである。第2のモデル（マクロモデルⅡ）は、マクロモデルⅠの生産函数、投資函数、輸出函数、輸入函数、政府収入函数のそれぞれを細分化し、国際収支バランスの定義式を補充したものである。モデルは逐次決定型になるように工夫されており（その理由づけは正確でない）、推定法として逐次最小二乗法が採用されている。

総合モデルは、1個のマクロモデルと3個のサブ

モデル（マイクロモデル、輸出モデル、輸入モデル）よりなり、例えば、各サブモデルの値を積み上げれば、マクロモデルの対応する変数の値になるというふうに、これら4個のモデルは相互に関係づけられているのである。モデルの推定は逐次最小二乗法に基づいている。

この総合モデルに基づいた1960～70年の予測によれば、GDPの年平均成長率は2.96%（ただし、人口成長率は2.02%と想定されている）、輸出入はほぼ横ばい（ただし、輸出における鉱産物からその他商品への重点の移行は認められる）、赤字財政によるインフレの進行、外貨準備をプラスに保つためには外国からの援助を毎年ほぼ6千万ドルと想定せねばならないこと、等の結果が得られている。このように、本書によって提示された1960年代のインドネシア経済はかなり悲観的な様相を帯びているのであるが、その原因として、著者は、インドネシア経済における前述した6項目のネガティブな特質が相互に影響しあって一つの悪循環を形成し、それが経済成長の最大の障害となっている事実を指摘している。（この悲観的予測は、1960年代前半の実績に近く、むしろ楽観的であったといえるくらいである。）

以上が本書の概要である。少々冗長であると感じられる部分がなきにしもあらずなのだが、最終的な総合モデルへと一步一步着実に拡大発展してゆくモデルビルディングのプロセスを手取るように見ることが出来ると同時に、低開発国経済に関する計量経済学的分析の示唆に富んだ一つの例を見ることが出来るであろう。最後に、本書マクロモデルⅡにおけるモデルの安定性テストの議論が、軍事支出の経済効果の分析にも応用されていることを指摘しておこう。（T. Fukuchi, "Political Tension versus Economic Growth—the Case of Indonesia—," *Japan's Future in Southeast Asia*, Symposium Series II, The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto Univ. 1966）

（江崎光男・東南ア研）